



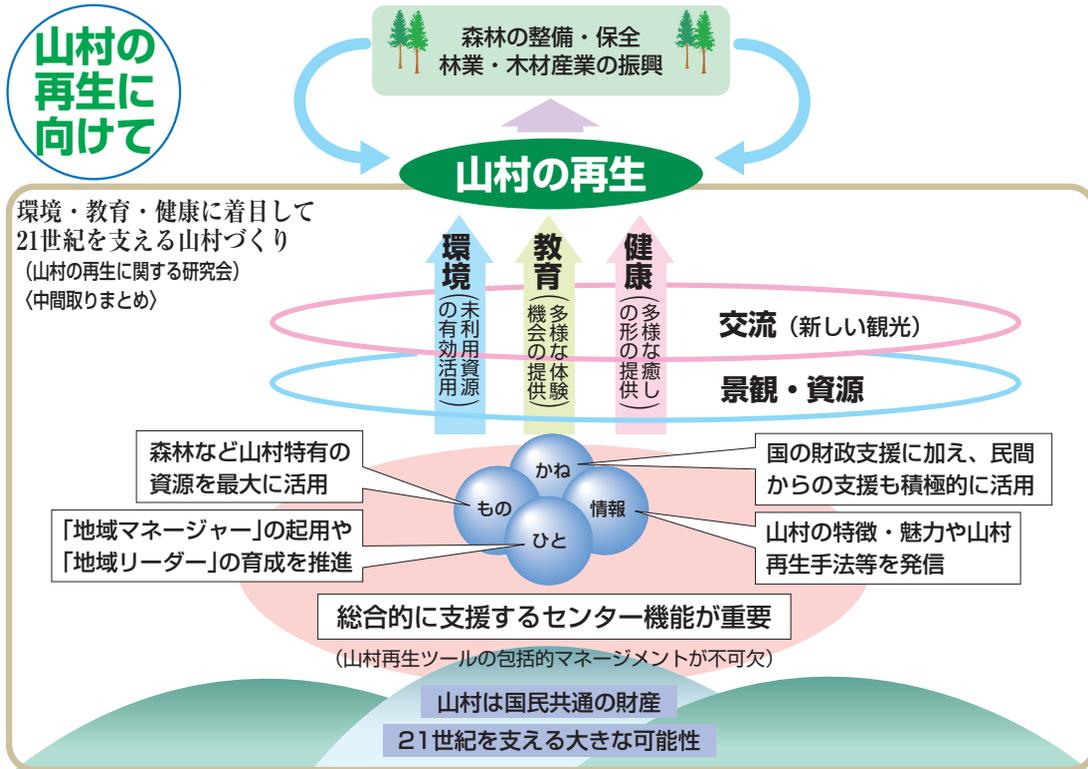
山村の再生に向けて

森林を支える基盤であり、経済社会も支える大きな可能性を秘めた山村。
現在の問題点や国民のライフスタイルの変化を踏まえつつ、
21世紀の山村の在り方について検討する「山村再生に関する研究会」が
3月19日から6月13日にかけ5回に渡って行われました。
環境、教育、健康に着目しての新たな山村づくりに熱い議論が交わされました。

**山村の未利用木質資源を
有効に活用していくために**

森林の整備、林業の再生を前提とし、二一世紀を支える山村の可能性を探り、その方策を提示した「山村再生に関する研究会」が三か月にわたり開催されました。山村の現状と問題点についての議論、先進的な取組を行っている団体などからのヒアリング、具体的な山村再生に向けての論点について話し合った会の指揮をとったのは「美しい森林づくり全国推進会議」の事務局長でもある宮林茂幸氏（東京農業大学地域環境科学部教授）。小田切徳美氏（明治大学農学部教授）、古藤田香代子氏（一橋大学社会学部講師）、杉山嘉英氏（静岡県川根本町長）、曾根原久司氏（NPO法人えがおつなげて代表理事）、奈須正裕氏（上智大学総合人間科学部教授）、平田賢典氏（みずほ総合研究所（株）主任研究員）など、さまざまな専門分野で活躍する参加者たちのディスカッションは非常に意義深いものとなりました。

林業採算性の悪化、人口の減少・高齢化が進展する中において、豊かな自然の新エネルギーやマテリア



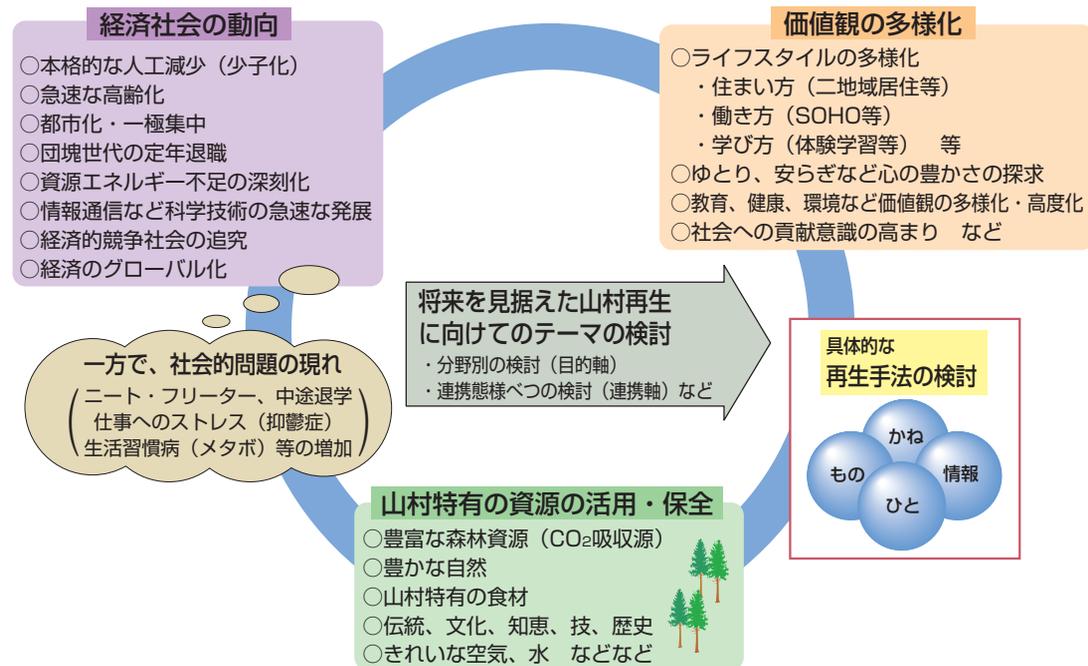
ルの供給、ストレス社会のライフスタイルに応じた活動の場も提供できる山村は国民全体の財産として位置

つけられるもの。その観点に立って、具体的に何をすべきかという議論が交わされました。研究会が着目した

のは「環境（新素材・エネルギー）」と「教育」と「健康」です。木質由来の環境にやさしい素材やエネルギー

ギーを地域で生産することにより、山村の未利用木質資源を有効に活用していくこと、幅広い世代が山村の森林資源や伝統、文化に触れて多様な経験を

経済社会の動向等を踏まえた山村の再生



と、日常の健康維持や精神疾患の改善のための癒し効果としての森林を活用すること。これらの取組が山村の活性化や森林の整備、ひいては林業の再生にも繋がっていくというヴィジョンが提案されました。そのためにもひと、もの、かね、情報といった山村再生ツールを提供するなど、山村を総合的に支援するセンター機能の整備が重要です。この五回の研究会での中間報告を視野に入れ、林野庁ではさらに詳細に検討を進め、二一世紀を支える山村づくりに向けて引き続き、可能性を探っていきます。